



TITLE:

付合文藝史序説(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

宮田, 正信

CITATION:

宮田, 正信. 付合文藝史序説. 京都大学, 1970, 文学博士

ISSUE DATE:

1970-01-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/213275>

RIGHT:

氏 名	宮 田 正 信 みや た まさ のぶ
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 51 号
学位授与の日付	昭 和 45 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	付合文藝史序説

論文調査委員 (主 査)
教 授 野 間 光 辰 教 授 赤 松 俊 秀 教 授 浜 田 敦

論 文 内 容 の 要 旨

本論文において、著者が「付合文芸」の名のもとに、その歴史的变化・展開の跡を明らかにせんとするのは、連歌・俳諧・雑俳の三者である。

付合（つけあひ）とは、和歌形式の上の句五・七・五（長句）と下の句七・七（短句）をそれぞれ独立した単位として、順（長句＋短句）・逆（短句＋長句）自在に連結して成り立つものであって、著者はこれを言語の対話的機能の上に成り立つものと考え、その対話的・問答的構造を共有する連歌・俳諧・雑俳の三者を「付合文芸」なる名称のもとに包括し、その総合的研究を志すものである。

しかるに従来これらの研究は、個別的に狭く深く、次第に、精細の度を加え来たったが、その半面代表的な作家・作品の研究に集中する傾きがあり、とりわけ雑俳の研究は、連歌・俳諧のそれに比して一段と視野狭く、極めて好事的・趣味的に墮し、広い歴史的展望の上に立って雑俳全般にわたって試みた見るに足るべき研究は、極めて乏しい実情にある。

著者はこの実情に鑑み、本論文には特に雑俳を中心に上げ、その歴史的变化・展開の事実をまず明らかに、さらにこれを付合文芸史全体の中に位置づけることを主要なる目的とし、上にいうが如き連歌・俳諧・雑俳三者の総合的研究への道を拓くことを意図するのである。

従って本論文は、著者のかかる意図を具現するものとして、次の三編から成る。

前編：——付合文芸の成立とその展開（雑俳の文芸史的背景）

中編：——付合文芸としての雑俳の成立とその展開（雑俳史の研究Ⅰ）

後編：——付合文芸から出た独詠句（雑俳史の研究Ⅱ）

前編において、著者は付合文芸として雑俳に先行する連歌・俳諧を取り上げ、雑俳成立の背景として、連歌より俳諧にいたる付合文芸史上の重要な問題について考察を加える。その場合著者が特に力を入れて説いているのは、長短二句の順逆自在な連結による短連歌の成立とその対話的構造に由来する機智性と社交性であり、それを承け継いだ前句付俳諧の啓蒙性と娯楽性である。著者はそこに、付合文芸としての雑

俳の前句付の生まれるべき素地を認めるのである。

中編は、本論文において著者の最も主眼とするところである。即ち前句付俳諧の有する啓蒙性（俳諧への入門、楷梯・手引という意味において、著者は「出門性」と称する）と娯楽性（点取りの高点争いと景品獲得への期待など）が、元禄期以後における俳諧人口の増加に伴ない、娯楽性のより濃厚なる笠付の一体を生むに至る。笠付とは五・七・五の長句の最初の五文字を題として、それに七・七の十二文字を以て付けることをいうのであるが、一名「烏帽子付」とも「五文字付」とも「冠付」とも称せられた。著者はこの「笠付」の成立に雑俳の成立を求めるのである。そして以下元禄期・享保期・明和安永期・文化文政期・天保期の五期に時代を分かち、地域的には上方（京都・大阪）・江戸・地方（近江・伊勢・名古屋・和歌山等）の各地にわたって、雑俳展開の跡を子細に叙述する。その際大衆の自由参加と公開を建前とする雑俳の「興行性」に留意し、資料を厳密に吟味して、一々その興行せられた時期・場所をまず決定し、ついでその点者・作者に及び、その作風の特色を論じている。

この雑俳の前句付の高点句が独立した一句として鑑賞せられ、また制作せられるに至ったのが、雑俳の発句であり折句であり川柳である。著者は雑俳の展開の過程において新たに派生した、非付合文芸たるこれらの独詠句の成立に関する考察を、後編として加える。中にも「柳多留」の板行とその影響については多くの紙幅を費やし、川柳評前句付の独詠句化と、その影響に派生した独詠の短小詩群の消長を詳述する。

最後に、「付合文芸と日本詩歌」なる一章を以て結びに代えている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、次の二つの点において、現在における最もすぐれた研究として、高く評価せらるべきものであると考える。

第一：——雑俳史の研究として。

さきに論文内容の要旨において紹介したように、全部三編より成る本論文の中核をなすものは、中編・後編の二編にわたって詳論せられたその雑俳史の研究ⅠならびにⅡである。雑俳の研究史を回顧するに、従来の雑俳は川柳の尾氈骨なるが如くに取り扱われ、川柳の成立を論ずるに際してのみ、付録的にその前身たる前句付、前句付より分派した雑俳を取り上げるに過ぎなかった。雑俳の意義を正しく評価し、雑俳より川柳へ展開の歴史において、そのあるべき位置づけを試みたものは、本論文の著者にとっては先師に当たる頼原退蔵博士の「雑俳前史」あるいは「雑俳川柳史考」以外には、いまだ嘗てなかったのである。著者は実にこの頼原博士の後を承けて、博士の歿後二十年以上にも及ぶ研究の空白をよく埋め、真に雑俳史の研究の名に値するものとして、ここに本論文を完成したということが出来るのである。

もっとも、頼原博士以後長く雑俳研究の空白期間が続いたというのは、いささか不当であるかも知れない。近年に至って雑俳資料の蒐集・翻刻盛んに行なわれ、雑俳用語の辞典の如きものまで単行せられているのは事実である。しかしそれらは多く資料の紹介と難語の注釈に止まり、史的研究として見るに足るべきものは極めて少ない。それは嘗て川柳の研究において、川柳点の高点句集たる「柳樽」に研究集中し、その用語・風俗・故事出典の好事的な穿鑿に明け暮れたまま研究が「柳樽」の成立に及ぶに至っても、

「柳樽」諸編の搜索,「万句合」曆摺りの蒐集・紹介に終始したのと一般である。

これに反して著者は、夥しい雑俳資料を丹念に渉猟するばかりでなく、一々資料についてその興行の時期・地域・方法を考定し、これを年代的に整理して、一貫的史的記述のもとにその変化・発展を跡づけている。その間、頼原博士以後における新しい見解や資料の紹介も少なくない。前句付俳諧における「切句」の持つ意義の重要性の指摘、「笠付」の成立に雑俳の成立を見る説の如きは、その一例である。

第二：——付合文芸の史的研究として

本論文の前編は、「雑俳の文芸史的背景」として「付合文芸の成立とその展開」の記述に当てられている。著者の命名にかかる「付合文芸」なる名称は、恐らく頼原博士の「付句文芸」なる名称に示唆される場所があったのであろうが、連歌・俳諧・雑俳の三者を総括する名称としては、「付合文芸」という方むしろ勝れりと思う。そしてこの名称のもとに、従来個別的に扱われ来たった三者を一貫した歴史の流れの上に把握し、特に本論文においては雑俳を連歌・俳諧の後を承けて特異な発展を遂げた「付合文芸」として、文芸史的に位置づけようとしたところ、並々ならぬ著者の野心を見るに足る。その意図に添うて、短連歌の長短二句順逆自在なる連結形式とその機智性と社交性に、付合文芸の萌芽を認め、それを承けた犬筑波集の前句付を経て、前句付俳諧から雑俳の前句付へと展開して行く過程の論述は、従来の連歌史・俳諧史、もしくはこれらを併せ記した連俳史などに見られぬ新鮮味がある。

しかしながら著者は、「付合文芸」成立の唯一の根拠を、言語の対話的機能に求めて論じているが、この点については今少しく考察を深むべき余地があるように思われる。何となれば言語の対話的機能だけを以てしては、何故にかくの如き「付合文芸」が我が国において特異な発展を遂げたのであるが、その所以を十分に説明することは出来ない。明治以後「付合文芸」の正統たる連歌・俳諧・雑俳が廃れて、それらより派生独立した著者のいわゆる独詠句（俳諧にあっては俳句、雑俳にあっては川柳もしくは狂句）が、何故に行なわれるようになったのであるか、これまた十分に説明し得るものとは思われないからである。

しかしながら以上の如きは、著者の志す「付合文芸史」として将来において克服せらるべき研究課題であって、大いに著者の今後の研究に期待したいと思う。

以上審査するところにより、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。